



## その1

「自然栽培パーティ」は、やはり自然発生的な活動の中で生まれた。佐伯康人さんが、自然栽培を障害者施設に広めるために、二年ほど前からあつちこつちに指導に動き回っていた。まったくの手弁当で。それを伝え聞いたヤマト福祉財団が、あご足分だけでも助けましょう、と名乗りを上げた。それをきっかけに、この二〇一五年四月に正式な活動となった。すぐさま、全国五事業所が参加。だがいままでも通り、佐伯さんは、声がかかれればヒヨイヒヨどこへでも行く。障害者施設の枠も超える。この軽さ、「自然栽培の寅さん」と呼ばうかな。



愛媛、松山で自然栽培に取り組む佐伯康人さん

## 「自然栽培の寅さん」が行く



どうして、ぼくらは、こんなにワクワクするんだろう

「休耕地の手当てができない」「苗床なんてどうしてつくるの」。自然栽培パーティがスタートすると、メンバー同士がSNSで情報交換をはじめた。佐伯さんが答える。結局、「佐伯さん来てよ、田んぼを見てよ」という声になる。

五事業所の人だけでなく、自然栽培に興味のある人を呼び込んで、いつしか五〇人近くの人がSNSの仲間に加わった。すると、本来は、参加メンバーでないはずの人の書き込みも入る。「新しく借りた田んぼの水が抜けない。乾かすために、畝を立てたような溝を掘りたい」ので、ぜひ手伝ってほしい、というSOS。自然栽培では、田植えの前に田んぼを乾かしておく。佐伯さんは、すぐ手伝いに行く、と返信。人手がいるから、みんなも応援して、と呼びかけた。すぐさま、スコップを用意して行きますとか、二升の米を炊いておにぎりにして駆けつけるとか、助っ人が名乗り出た(でも、そこは施設じゃないんだけどな)。

佐伯さんの講演を聞いて、自分で自然栽培がやりたくなった人、農薬・化学肥料漬けの作物にうんざりした人、

棚田や畑を守りたい人など、思いはさまざま。自分で率先してはやれないが、がんばる人を応援したい人もいる。さまざまなか、どんな動機でも寄つといで、わずらわしくなったら、いつ去つてもいい。「自然栽培パーティ」は、どこまでも自然に、自分に正直に、を大切にする。だから、グループではなく、パーティなのだ。

モグラもウグイスも、地域絵出の田植え

自然栽培の田植えは、慣行栽培より少し遅め。五月末からはじまった。『コトノネ』編集部は、広島県福山市の社会福祉法人「ゼノ」少年牧場の取材に出かけた。「ゼノ」では、二カ所の施設が参加。「ゆめサポートバク」と「JOBプラスはんど」。今年(二〇一五年)、米づくりに挑戦するのは、バクだ。町中から三〇分ほど走った山里に、バクはあった。裏山には、希少性の高いブッポウソウが棲む。「わたしたちも鳴



編集部=文  
text by KOTONONE  
河野 豊=写真  
photograph by Yutaka Kohno  
小俣裕人=イラストレーション  
illustration by Hirohito Omata